

# 一年間の精進を舞台上 素人のよさ味わって！

## 第55回 邦楽祭



一、舞囃子 「放下僧」 左端 沢田又一（太鼓）

平成21年11月23日（月・祝）、医家芸術祭「医家邦楽祭」は回を重ねて55を数えた。出演の諸先生方も医業に従事して数十年という大ベテランぞろい。多忙な合間を縫って、舞踊に、長唄に、三味線にと精進、晴れ舞台で精いっぱい披露された。その模様を今回も邦楽評論家、宮西芳緒氏に紹介してもらった。（上演順・一部編集上の都合で入れ替えました。写真説明は敬称略）



開会あいさつ  
太田怜委員長

### 評 宮 西 芳 緒

毎年、勤労感謝の日に日本橋三越劇場で開かれる日本医家芸術クラブ主催の邦楽の祭典。秋の芸術シーズンの掉尾を飾る風物詩として、すっかり定着した公演である。

連続して出演され「医家邦楽祭」の顔ともいえるご定連の先生方は、失礼ながら着実にご高齢に達しているが、例年通り矍鑠とした舞台を努めていらっしやる。

そうした先達を支えて活躍されている先生方も、すでに人生に確固とした立場を確立されていらっしやる方々に違いはない。そうした先生方が一年間、この日のために精進を重ねて舞台上に臨まれる。観る者聴く者に勇気を与えてくださる舞台の数々である。今回はどんな曲を？どんな趣向で？と、大きな期待を胸に、開幕を待つ。

「開会のことば」は、日本医家芸術クラブ委員長の太田怜先生。過日、同劇場で開かれた清元宗家の演奏会を聴いて、玄人と素人の違いを痛感したと述べる。自分たちの会は素人の会ゆえ、「芸がない分、個性ばかりで、その個性を楽しんで

今秋も  
三越劇場で  
(11月23日)

ください。逆に余裕のなさが素人の良さでもあり、お客を酔わせるより自分が酔っているのも素人の良いところ」とアピールする。それゆえ「今日は」一生懸命「自己陶醉」個性を楽しん欲しい」と重ねて語り、挨拶とする。

そうした微笑ましい舞台から玄人はだしの舞台まで、全十四番の番組が真摯に、整然と、和やかに上演された。

### 一、舞囃子（観世流）『放下僧』

大鼓の沢田又一先生（横浜市、外科）をはじめ、小鼓・笛と地謡の方々が並び、シテは梅津浄子氏。横浜医師会の能楽愛好会のメンバーによる一幕で、この「邦楽祭」出演もすでに十年あまりとなり、今回も例年通り邦楽祭の開幕を飾る。

内容は、地元・横浜市内にある瀬戸神社の境内を舞台とする仇討ちの物語で、旅芸人である「放下」に扮して曲舞を舞い、鞆鼓を打ち、歌を唄って相手を油断させ、みごと親の敵を討つ兄弟。その鞆

鼓を打って舞う芸づくしの件りを抜き出した、緊張感を保ちつつも華やかな舞囃子で、沢田先生の大鼓を中心に、呼吸の合った梅津氏の舞いが、・面白の花の都や」と、静かに花を添えた。

### 二、小唄『白雪』『夕焼け』

『明治一代女』『雪はしんしん』



現在は、「毎日の時間を大事にする生活」のその一つとして、「いままでに録音してあるテープで小唄の三味線と唄を起こして、皆様にお稽古していただいています」という、咲村鈴音こと川口敷子先生（江東区、看護科）の三味線による小唄四題。

『白菊』と『夕焼け』は、前年から稽古を始めたという式田とし子氏が唄う。

「春に膝を手術され、リハビリに頑張つての出演」という式田氏を暖かく見守るような川口先生の糸が耳に残る。『明治一代女』と『雪はしんしん』は、もうお馴染みとなつた宮田さた氏の唄。芝居気分を大事にしなが、端正な演奏を聞かせる。

### 二、小唄 ㊦ 川口敷子

㊦ 式田とし子

㊦㊦ 宮田さた



### 三、謡曲『高砂』

佐藤明德先生（宝生流）の謡、平野宏先生と近藤智雄先生の小鼓（大蔵流）に

よる一番（いずれも練馬区、外科）で、  
・高砂やこの浦舟に帆を上げて」と、周知の寿ぎの曲の一節が、二調の小鼓としっかり通る声とで会場内に響いた。



↑ 三、 謡曲「高砂」（左から）平野 宏、佐藤明德、近藤智雄

#### 四、小唄『虫の音』『酒と女』

『二年越し』『箕輪心中』

前々幕と同じく川口敷子先生の三味線による小唄四題で、しっとりとした『虫の音』と、ちよつと浮かれてノリの良い『酒と女』は、「大病を



#### 四、小唄

ⓐ 加藤俊男  
ⓑ 鈴木聡明

克服して」という加藤俊男氏の唄。川口先生の糸は静かに、穏やかに、情景を描き出す。

「舞台では稽古の八割しか成果を出せませんが」という鈴木聡明氏は、・あんまりじゃぞえ治兵衛どの、・愚痴も涙も『二年越し』の口説きと、・君と寝やろか五千石取ろか、何の五千石、君と寝よ」と、粋な『箕輪心中』の糸は、あくまでも優しい。



#### 五、仕舞『喜多流』『羽衣』

鈴木浩之先生（練馬区、外科）のシテ  
写真。「本日の羽衣は、どのようにに天空に舞い戻っていくか、ご覧ください」と、その意気込みを伝えて、・東遊びの



数々」から「霞に紛れて失せにけり」まで、おおらかに舞う。

#### 六、長唄『勝三郎連獅子』

大森湜子先生（文京区、施設役員）が、吉住小三郎師ほかとの唄、吉住小茂々師ほかの三味線で、親獅子が仔獅子を千尋



六、長唄 「勝三郎連獅子」 大森湊子



の谷底に蹴落として、自力で這い上がって来た仔のみを育てるといふ故事を描く。・それ牡丹は百花の王にして」から、牡丹咲き乱れる桃源郷に親仔の獅子が舞い戯れる様を、深みのある声で優雅に表現。三味線ははつきりとした音色で唄を助け、格調を高めている。

七、舞踊(長唄) 『七福神』

山梨県立中央病院ならびに山梨厚生病院の名誉院長を勤めている花柳和之城こと飯田文良先生(笛吹市、外科)写真)は、今回が十一回目の出演という。軽妙な曲に取り組んでめでたく舞い、・ながきよの「七福

神を踊り分け、・なみのりふねのおとのよきかな」と『宝船』を結んで、全篇機嫌良く、・拍子揃えて」一曲を踊り切る。一徹な雰囲気緊張感を伴って伝わってきた。



十一、小唄 『髪結新三』 『十六夜清心』  
山田新太郎先生(練馬区、整形外科)写真)は、今回も芝居小唄を二題。・目に青葉 山ほととぎす初鯉」、「かつおかつお」の売り声を聞く湯帰りの江戸前の小粋な悪

党『髪結新三』と、一命をとりとめてこちらものちには鬼薙の清吉と十六夜お小夜という二つ名前がゆすり場を演じる『十六夜清心』の・この世で添われぬ二人が悪縁」の心中

場を、柴小亜也師の三味線で唄う。山田先生はさぞ芝居がお好きなのだろうと、毎回、聴きながら思う。

## 八、長唄『二人椀久』

杵屋勝・に子こと山崎律子先生（台東区、皮膚科）は、日吉小間蔵師ほかとの唄、杵屋勝国師ほかの三味線。囃子付。

山崎先生は声量もあり、しっかりとした真つ直ぐな声が心地良い。賑やかな曲調から一転、・ゆく水に「深い情感を持つ唄い、・もうし椀久さん」を受けて「ふられず帰る」たつぷりと唄い、劇場の空気を収斂して見せた実力。・拍子揃えてわざくれ」三味線と鳴物に渡して、・じたい某は」から早間の楽しい件りも流されることなく落ち着いて唄い、勝国師はさすが、三味線の技巧で観客を魅了、・さとさととは」から夢醒めに向かつて急転して行く予兆を的確に聞かせ、大きな拍手を集めて幕を切った。



↑ 八、長唄「二人椀久」

↓ 九、長唄「吾妻八景」



## 九、長唄『吾妻八景』（写真上）

「邦楽祭」には今回が初参加という秋葉則子先生（八代代市、内科）の三味線は、柏伊三郎師ほかと呼吸もよく合つて、日本橋、浅草寺、隅田川など、江戸の・八つの名所」の情景を丁寧に描き出す。「まさか、この舞台で発表できるとは夢のよう」と語る秋葉先生は、千葉県女性医師部会の会長として活躍されている由。唄は杵屋秀子師ほか。ニューフェイスの登場が喜ばしい。

## 十、清元『落人』

今回も一緒に語られる予定だった名コンビの菅又淳先生（大田区、精神科）が入院のため休演となり、太田怜先生（目黒区、循環器科）は急遽、両先生の師匠である清元延千宗師に出演を願い、おの喉を聴かせる。清元延

志寿佳師ほかの三味線。

道行のお軽と、お軽に横恋慕して・うぬが主人の……」と勘平にからむ鷺坂伴内の二役を語り分けるのが今回の太田先生のご趣向だが、ご本人は「よる年波で、初々しいお軽が熟女風になっておりますが、その点はご容赦のほどを」、そして「幸か不幸か、今月の歌舞伎座は忠臣蔵の通しです。昼の部の切がこの落人です。で、今回の私の落人に食傷された方は、どうか歌舞伎座の方でお口直しのほどを」と、アナウンスで伝えるのもご愛嬌。心を込めたお軽の一路と、・勘平、返事は丹頂丹頂」と鳥づくしの伴内のチャリまで機嫌よく聞かせた。



↑ 十、清元「落人」

↓ 十二、長唄 「三曲糸の調べ」

十二、長唄 『三曲糸の調べ』



・影というも月の縁、清しというも……」・影清く……」と、杵屋正澄己こと高橋妙子先生（中央区、耳鼻咽喉科）、杵屋正園師ほかの三味線唄は杵屋五功次師ほか。囃子付。

箏・三味線・胡弓の音色と技巧を（すべて三味線で）聴かせてなお、遊女・阿古屋の風格と、そのこころの清く澄んでいる様とを伝えなくてはならない至難の曲を、高橋先生は華やかに、丁寧に演奏する。実に聴き心えのある一幕となっていた。

十三、舞踊（清元）『お祭り』

「二度、芸者の格好がしてみたかったの」という尾上菊尚こと大川尚美先生（横浜市、小児科）が、師匠の子息・尾上菊方師の若い者を相手に踊る。とさかの前髪に大きな男鬘「待ってました」の大同こうに、「待っていたとは有難い」と気づく風よく

応え、しかし可愛らしい芸者姿である。

粋な引くもの尽くしもどこか可憐に、  
しく見せていた。 楽



↑ 十三、舞踊（清元）「お祭り」

↓ 十二、長唄 「勝三郎船弁慶」



#### 十四、長唄『勝三郎船弁慶』

五十五回目となる医家邦楽祭の大切は、杵屋和重・東音前村八重子こと前村八重子先生（東久留米市、小児科）が、杵屋栄敏郎師ほかとの三味線、東音福田克也師ほかの唄で、今回も大曲を披露する。囃子付。

「では熱演をお楽しみください」というアナウンスに応えるように、福田師の・今日思い立つ旅衣」と重厚な語り出しに始まり、義経との別れに烏帽子を渡されて一さし舞う静御前の憂いを帯びた品格、間狂言を挟んでノチの知盛の霊の凄絶へと、前村先生の独壇場といえるスケールの大きな世界が描き出される。・そもそもこれは桓武天皇九代の後胤」……いかに義経」と、芸格を湛えた福田師の唄を受けて、変化に富んだ一曲を冴えやかにリードして盛り上げてゆく前村先生の年季の入った三味線。

毎年欠かさず聴かせてくれる、衰えを知らないエネルギーなパワーもさることながら、・そのとき義経少しも騒がず」からきつちりと舞台の枠に納める正しさが素晴らしく、また次回はどんな演奏を聴かせてくださるか、楽しみである。

「素人の芸でございますが、長年の成

果が發揮出来たと思います」と、「閉会のことば」は、新たに同クラブ邦楽部副委員長になられた川口敷子先生。



閉会あいさつ  
川口敷子副部長

## 三味線の音色に魅せられ

再三の中断を経て再開

初参加のことは 秋葉 則子

長い歴史のあるこの邦楽祭に参加でき大変感激しております。毎年、三越劇場へは足を運び、聞かせていただいておりました。

司会は高松真弓氏、進行は中島信子先生に代わって高橋妙子邦楽部部長。  
今後、是非とも、少しずつでも若い先生方にこの意義深い公演に加わっていただき、第百回公演を目指してさらに盛り上げてゆかれることを、客席からも希望したい。

.....

参加をご希望の方は、事務局までご連絡ください。

☎ 042・344・8056

この度は主人の後押しがあつてエントリーしました。それには師匠のお許しが必要だめなことでした。思い切つてお話しをいたしました。入門してまだ3年目でした。快くやつてみたらと言われ、またお唄の師匠方や三味線の師匠方にも出演依頼をしていただきました。感謝しております。一人ではどうしようもありませんから。

小学6年生の頃に近所に長唄の師匠がおり妹と二人でお稽古に通いました。中学3年で高校受験、その後も大学受験、国家試験で全くお稽古ことから遠ざかっ

ていました。30年ぐらいいして開業という忙しい最中に急に三味線の音を懐かしく思い出し、患者さんの紹介でお稽古に通い出しました。5、6年ほど経つたとき師匠が亡くなり止めてしまいました。

三味線の音に魅せられて邦楽祭に出かけ、またやつてみたいと思うようになりました。そして今の柏伊三郎師匠を紹介していただき、入門の許しを得てお稽古中です。舞台に出るといふことはお稽古の態度に変化がありました。毎回の稽古日には予習もし、帰ってから復習もし、真剣に取り組みました。良い刺激を受けました。

テープやビデオをみてまだまだ稽古の足りなき、未熟さがはつきり映つていては少し限りです。もし次回があるなら、もう少し上達している自分を見ていただかなければと反省しています。劇場にお出で下さった皆様に感謝申し上げます。また多くの関係者に有り難うございましたと伝えたいです。



秋葉則子先生



舞台上をズームアップ

沢田又一先生



高橋妙子先生

山崎律子先生



前村八重子先生



かねてから悩みのタネでした。A5判という紙幅、横一列にお囃子付きなどで並ばれては、会員の先生が豆粒。そこでスポットを絞りました。

大森漫子先生



出を待つ大川先生



太田 怜先生